広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第53集

銭神第1・3号古墳発掘調査報告書

1986

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第53集
銭神第1・3号古墳発掘調査報告書正誤表

頁・行	誤	正
9・第5図	第2号	第3号
〃　〃	第3号	第2号
9・11	最下段に裾え	最下段に据え
13・5	雑な石積の	雑な石積みの
14・25	幅3.8m	幅3.9m
27・8	ほぼ7	ほぼ7

銭神第1・3号古墳発掘調査報告書

1986

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

例　　言

1．本書は，昭和60（1985）年度に，広島県企業局との委託契約によって財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した小原地区土地造成事業に係る銭神（ぜにがみ）第1・3号古墳（三原市沼田西（ぬたにし）町大字惣定（そうじょう）字銭神（ぜにがみ）80－1）の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は，財団法人広島県埋蔵文化財調査センター調査研究員植田千佳穂，松井和幸が実施した。

3．遺構の実測，写真撮影は植田，松井，出土遺物の整理，復元，図面の整図，写真撮影は，植田，松井，沢元保夫，本書の執筆及び編集は松井が行った。

4．第1図は建設省国土地理院発行の1：25,000の地形図（三原，竹原）を1：2に縮小して使用したものである。

5．銭神第1号古墳は銭神古墳，銭神第3号古墳は銭神西古墳と称して調査を実施したが，調査中に新たに古墳が発見されたため，それらを含めて1つの古墳群とし，銭神古墳は銭神第1号，銭神西古墳は銭神第3号古墳と称することとした。

目　　次

I　はじめに……1

II　周辺地域の歴史的環境……2

III　調査の概要……8

　1．銭神第1号古墳

　2．銭神第3号古墳

IV　まとめ……28

I はじめに

広島県企業局（以下「県企業局」という）は，昭和57（1982）年に，三原市沼田西町小原地区一帯の丘陵部に県営工業団地三原地区の建設計画を立案した。この事業は，「三原新広域市町村圏振興計画」の一環として，秩序ある発展と魅力ある定住社会を形成するため，適正な土地利用に基づく工業の計画的導入により地域の振興を図り，農林業とともに地域を支える主要産業として育成し，地域住民の就業機会の増大を図ろうとしたものであり，事業対象面積は87.3haで，昭和55（1980）年から計画が進められてきた。

県企業局では，昭和57（1982）年1月に広島県教育委員会（以下「県教委」という）に対し工事予定地内遺跡の有無に関しての照会を行った。これを受けて，県教委は工業団地建設予定地内遺跡の分布調査を実施し，宮ノ谷第1～3号古墳と江尻古墳群中の2基が付近に存在することを県企業局へ回答した。県企業局はこれを受けて，5基の古墳を工事対象地から除外し，現状保存することとした。その後，昭和59（1984）年11月，工事中に銭神第1号古墳が発見されたことから，県教委は再び付近の踏査及び試掘調査を実施し，新たに銭神第3号古墳の存在を確認した。県教委は県企業局に対しこれら2基の古墳については事前に発掘調査を行い，記録保存することが必要である旨を通知した。県企業局はこれを受けて，財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下「センター」という）に昭和59年度内調査について協議した。しかし，センターでは既に当該年度の事業を実施していることから年度内の調査実施は困難であった。このため，調査は昭和60年度に実施することとなった。

発掘調査は，4月8日から5月24日まで実施し，6月1日には沼田西小学校において発掘調査報告会を行った。なお，発掘調査中に付近で新たに3基の古墳（銭神第2・4・5号古墳）を発見したが，これらについては，今年度中にセンターで調査を実施することは不可能なため，次年度以降改めて協議することとした。本書は，以上の経過をふまえて行った発掘調査の成果をまとめたものであり，今後の埋蔵文化財の研究資料として，またこの地域の歴史の一端を知る手がかりとして少しでも寄与できれば幸いである。

発掘調査にあたっては，広島県教育委員会の御指導を得るとともに，広島県企業局，三原市教育委員会，地元住民の方々の御協力を得ることができた。また，広島大学河瀬正利氏からは周辺遺跡に関する資料の提供を受けた。記して感謝の意を表したい。

II　周辺地域の歴史的環境

銭神古墳群は，三原市沼田西町大字惣定字銭神80－1に所在し，沼田川の右岸で，同河川の南約900mの丘陵上に分布している（第1図）。本古墳群は，沼田川の本流を望む位置にはなく，沼田川の支流の1つである天井川の開析によって形成された惣定の谷を見下す位置にある（第3図）。

沼田川は，広島県のほぼ中央部に位置する鷹ノ巣山塊（標高922m，賀茂郡福富町所在）に源を発し，三原市で瀬戸内海に注ぐ全長47.8km，流域面積540km²の河川である。[1] この沼田川は，豊田郡本郷町の市街地にさしかかったあたりで東へ大きく蛇行するが，この付近の沼田川右岸には標高100m未満の低丘陵が広範囲に分布している。銭神古墳群は，こうした沼田川右岸に広がる低位丘陵上に形成された古墳群の1つである。なお沼田川の下流域では尾原川，梨和川，仏通寺川，天井川などの小河川を併せて，狭いながらも沖積平野を形成し，史跡御年代古墳，同横見廃寺跡など著名な古代遺跡が集中して分布している。以下時代別に略述してみたい。

縄文時代の遺跡は，現在の三原市の市街地北東部に集中して分布しているが，当地付近では本郷町の片山遺跡や宮仕川遺跡で後期の土器が出土している。[2]

弥生時代の遺跡は，沼田川河床遺跡（第1図－1），久松遺跡（2），板箭遺跡（3），松江下垣内遺跡（4）などが知られている。[3] 明確な遺構は見つかっていないが，沼田川河床遺跡，下垣内遺跡では弥生時代前期の土器を出土しており，当時既にこの付近で沖積平野の形成がなされていたことが裏付けられる。また，本郷町の市街地の背後に広がる標高約70mの丘陵部には弥生時代後期の塔の岡遺跡が存在し，多量の土器片が採集されている。

古墳時代に入ると，沼田川支流の尾原川から本郷町の市街地付近の丘陵部に集中的に古墳が形成されてくる。当地の古墳の立地をみると，沼田川，尾原川及びこれらの河川の支流を望む丘陵の尾根の先端部分に限られている点に特色がある。これらの大部分は，前半期に属する古墳で，木棺ないし箱式石棺を内部主体とする直径10m，高さ1m程度の小規模の円墳が大部分を占め，5～10基程度まとまって1つの古墳群を形成している。以下当該期の状況を，調査の行われた古墳や主要な古墳でみてみたい。

宮ノ谷古墳群（8）は，沼田川に向って延びる標高30～60mの狭長な丘陵の先端部に並んだ計8基の円墳で構成されている。[4] 現在すでに第4号古墳から第8号古墳までは消滅しているが，いずれも直径10m，高さ1m程度の円墳であり，木棺ないしは，箱式石棺を内部主体としている。古墳群の形成された時期は，第8号古墳が最も古く5世紀中頃と考え

られているが，ほかはほぼ6世紀の初頭から中頃にかけての時期である。また，工場建設に伴って発掘調査された福礼(ふくれい)古墳（9）は，南北16m，東西18m，高さ2.5mの円墳である。粘土槨を内部主体とし，5世紀中頃の築造と考えられている。[5] 白鳳時代に創建された横見廃寺跡（19）の北東約900mにある陣べら遺跡群（7）は，県営沼田川工業用水場建設に伴って発掘調査が行われたが，弥生時代終末から古墳時代の初頭にかけての竪穴住居跡2，土壙，壺棺，石蓋土壙，箱式石棺及び6世紀初頭頃につくられたと考えられる第1号古墳などが検出されている。[6] この第1号古墳は，直径約8m，高さ1mの円墳であり，木棺直

第1図　主要遺跡分布図（■は弥生時代の遺跡，●は前半期の古墳，○は後半期の古墳，▲は古代寺院跡）

A	銭神古墳群	1	沼田川河床遺跡	2	久松遺跡	3	板箭遺跡
4	松江下垣内遺跡	5	新庄庵遺跡	6	塔の岡遺跡	7	陣べら遺跡群
8	宮ノ谷古墳群	9	福礼古墳	10	鍛冶屋迫古墳群	11	大谷古墳群
12	鳩岡古墳	13	兜山古墳	14	天高古墳群	15	長古原古墳群
16	梅木平古墳	17	御年代古墳	18	溜箭古墳	19	横見廃寺跡

葬と推定されている。

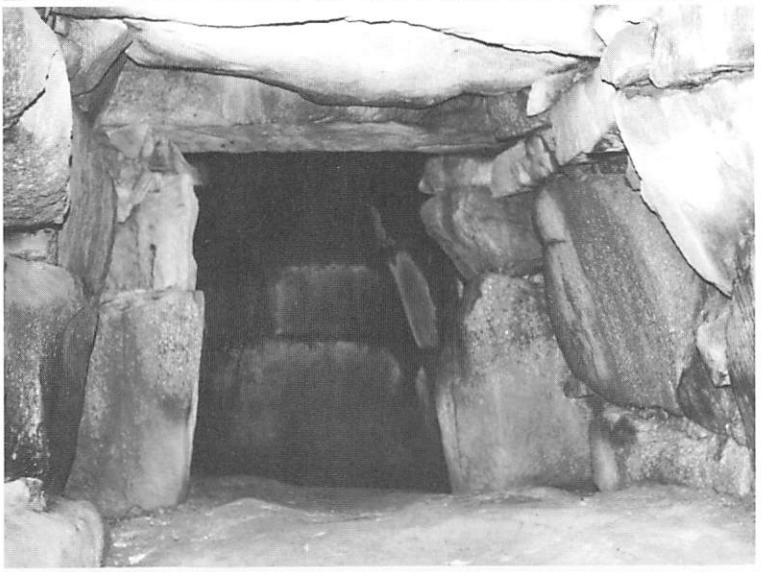
比較的規模の大きい前半期の古墳としては，全長22m，後円部径12m，前方部の長さ10.5mで，画文帯神獣鏡を出土し，5世紀初頭頃と考えられる鍛冶屋迫古墳群（10）中の第4号古墳(内部主体一箱式石棺)，本郷町南方に所在する全長16.5mの前方後円墳である大谷古墳群（11）中の第4号古墳，直径36.5m，高さ5.5mの円墳で，5世紀中頃の築造と考えられている鳩岡(はとおか)古墳(12)，直径45m，高さ7mで県下最大級の円墳で，5世紀後半頃の築造と考えられる県史跡兜山古墳（13）などがある。これら大型の前期古墳はいずれも沼田川を見下ろす丘陵上につくられており，また数も少ないことから，被葬者はこの沼田川流域一帯を支配した首長と考えられる。これに対し前述の小規模円墳は，沼田川や尾原川の支流が刻んだ谷を望む位置にあるものが多いことから，これら古墳群の被葬者は，古墳の眼下に広がる支谷一帯を支配していた中・小の族長クラスと推定される。

古墳時代の後半期になると，横穴式石室を内部主体とした古墳群が，尾原川や同じく沼田川の支流の1つである天井川などに流れ込む小河川によって形成された谷の奥部に形成されはじめてくる。なお，尾原川の流域などでは，昭和57（1982）年度にセンターで発掘調査を実施した天高(てつこう)第1号古墳[7]（14）のように，前述の箱式石棺や木棺を内部主体とする前半期と推定される中・小の古墳群の中に，横穴式石室を内部主体とする古墳が1～2基点在する。これに対し，天井川の流域では，今回調査を行った銭神古墳をはじめ，8基(うち4基はすでに消滅）からなる長古原(ちようこばら)古墳群（15），同じく塚の前古墳群や加古山古墳群などはいずれも横穴式石室を内部主体とする古墳群である。これら横穴式石室を内部主体とする古墳は，出土遺物などからいずれも6世紀後半～7世紀にかけて構築されたと考えられ，この頃すでにこれら古墳が立地している谷あいまで開発が進んでいたことがうかがえる。なお，市史跡の長古原第1号古墳は，奥行8.5m，玄室幅1.92m，玄室高2.24mと市内では最大規模の横穴式石室であり，同古墳群中の他の石室はいずれも奥行2～3mであるのに比べとりわけ大きい。他の古墳群にもほぼ同様の現象が認められ，同一古墳群中にも被葬者層にかなりの差があったことが考えられる。

この地域の特徴として，本郷町南方の尾原川流域の丘陵南麓部に大型の横穴式石室を内部主体とする古墳群が点在する点があげられる。県史跡梅木平(ばいきひら)古墳（16）は，羨道の前部が破壊されているが，奥行13.1m，幅2.9m，高さ4.2mの県内最大級の横穴式石室である。築造時期は，6世紀末～7世紀初頭にかけてと推定されている。同じく本郷町南方の史跡御年代(みとしろ)古墳（17）は，全長10.76m，前室の長さ3.0m，幅2.2m，高さ2.2m，後室の長さ3.6m，幅1.9m，高さ2.2mの横穴式石室である。石室の構築には，大部分一枚石を用いて

1　長古原第１号古墳
　　横穴式石室

2　梅木平古墳
　　横穴式石室



3　南方神社境内
　　組合式家形石棺

第２図　周辺の古墳

いる。そして前室，後室にそれぞれ長さ2.4m，幅1.4m，高さ1.2m程度の最終段階の形式と考えられる縄掛突起のない刳抜式の家形石棺が置かれている。築造の時期は，出土遺物などから6世紀末ないしは，7世紀中頃と考えられている[8]。県史跡貞丸第1号古墳は，羨道部が破壊されているが，現状で奥行5m，幅2.1m，高さ2.1mの横穴式石室を内部主体とする。玄室内には，長さ2.14m，幅1.15m，高さ0.6mの流紋岩質角礫凝灰岩製の刳抜式家形石棺の身部が置かれている。また県史跡貞丸第2号古墳は，第1号古墳と類似した規模の横穴式石室を有するが，石室内部にはかつて組合式家形石棺が納められていた。この他，南方神社境内の組合式家形石棺（第2図―3）と溜箭古墳（18）から出土の刳抜式家形石棺はいずれも流紋岩角礫凝灰岩製である[9]。7世紀初頭前後に築造されたこれら家形石棺を収める古墳は，いわゆる畿内型の古墳と考えられる。こうした古墳が本郷町南方を中心とする一帯に集中して分布するという点から，当地域が何らかの形で畿内の勢力と直接結びついていたことが理解できる。日本書紀仁徳天皇38年秋7月には佐伯部を安藝渟田（「倭名類聚抄」による古代の沼田郡の地域で，現在の三原市，豊田郡本郷町の一帯を含む沼田川下流域とみられる）に移住させたという記載がみられるが[10]，こうした畿内型の古墳の集中的な分布とも関連のある記述とも考えられ興味のある記事といえる。

歴史時代に入ると，史跡横見廃寺跡（19）が特筆される[11]。この寺跡は前述の梅木平古墳の東南約200mに位置し，昭和46（1971）年～昭和48（1973）年に県教委で発掘調査が行われた。その結果，寺域は東西約100m，南北約70mの範囲で，白鳳時代から奈良時代にかけての県内最古の寺院の1つであることが判明した。特に軒丸瓦は，山田寺式単弁文や，法隆寺若草伽藍跡や中宮寺跡出土のパルメット文軒丸瓦に類似したものがあり，大和の勢力との強い結びつきが考えられる[12]。なお，横見廃寺跡西方の山王神社の境内からは同時期の瓦が出土しており，瓦窯跡と考えられる遺跡がある。このように横見廃寺跡の建立は，前述の家形石棺を有する古墳が集中して分布している点と何らかの関連があるといえよう。

（註）

(1) 加藤正隆「沼田川」『広島県大百科事典』（下）　中国新聞社　昭和57(1982)年

(2) 広島県教育委員会『安芸横見廃寺の調査』Ⅰ　昭和47(1972)年

(3) 福井万千「付編1　考古編」『三原市史』第1巻通史編1　昭和52(1977)年

(4) 宮の谷古墳群発掘調査団・三原市教育委員会『三原市沼田東町宮の谷古墳群発掘調査ニュース』　昭和48(1973)年

(5) 広島県教育委員会『福礼古墳発掘調査報告』　昭和48(1973)年

(6) 陣べら遺跡群発掘調査団『陣べら遺跡群』　昭和46(1971)年

(7) (財)広島県埋蔵文化財調査センター『天高第1号古墳』　昭和58(1983)年

(8) 本村豪章氏は，現在東京国立博物館に収蔵されている同古墳出土遺物の年代から，古墳の築造年代を6世紀末頃と考えている。一方，間壁忠彦氏は，石室の中に収められている家形石棺の形式から古墳の築造年代を7世紀中頃と考えている。両者の年代観には約50年ほどの差があり，今後再検討すべき問題である。なお，脇坂光彦氏も7世紀中頃と考えている。

本村豪章「後期古墳の一様相」『考古論集』松崎寿和先生退官記念事業会　昭和52(1977)年

間壁忠彦「石材からみた山陽道西部の家形石棺」　同　上

脇坂光彦「石室の特徴からみた御年代古墳の性格」『芸備古墳文化論考』芸備友の会　昭和60(1985)年

(9) 貞丸第1号，第2号古墳，溜箭古墳及び南方神社境内の流紋岩角礫凝灰岩製の各家形石棺の石材は，兵庫県に産する竜山石製であることが確認されている。

間壁忠彦　前掲註(8)文献

(10) 仁徳天皇38年春正月癸酉朔戊寅秋7月に，猪名縣(いなのあがた)の佐伯部が天皇夫妻がその鳴き声に可憐之情をいだいていた牡鹿を苞苴(おおにえ)として献上してきたため，天皇はそのことを恨めしく思い，以後佐伯部を皇居に近づけまいと，有司に命じて安藝渟田(ぬた)に移した。これが今の渟田の佐伯部之祖であるという記載がみられる。

黒板勝美編『日本書記前篇』吉川弘文館　昭和46(1981)年

(11) 註(2)文献及び広島県教育委員会『横見廃寺の調査』II，III　昭和48(1973)年～昭和49(1974)年

(12) 山崎信二氏は，横見廃寺跡出土の有子葉単弁蓮華文軒丸瓦や忍冬葉単弁蓮華文軒丸瓦と類似する軒丸瓦を出土する寺院は，いずれも倭漢氏との関連を有し，また横見廃寺跡出土の有子葉単弁蓮華文軒丸瓦は奈良県檜隈寺出土の軒丸瓦と同笵関係にある可能性が強いとし，横見廃寺が倭漢氏と密接な関係をもって造営されたことを指摘している。

山崎信二「後期古墳と飛鳥白鳳寺院」『文化財論叢』　奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集刊行会　昭和58(1983)年

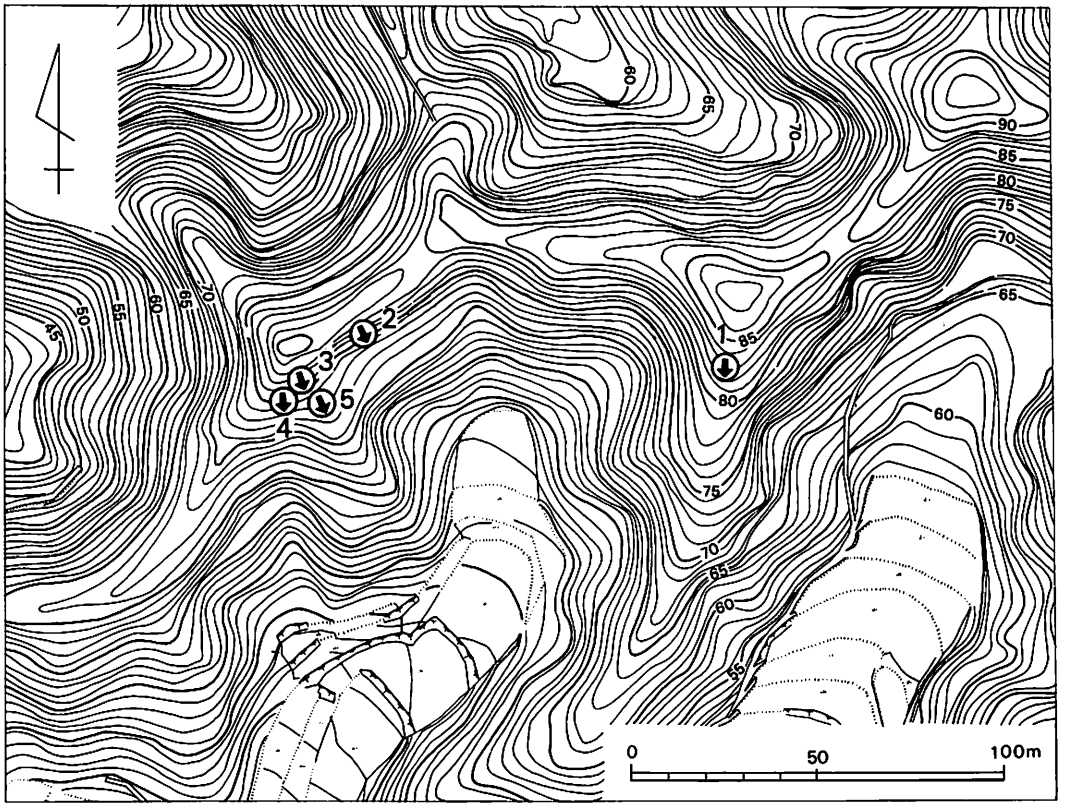
III 調査の概要

1. 銭神第1号古墳

a. 立地と墳丘（第3～6図）

古墳は，北東から南西に延びる尾根の頂部からやや下った標高約84mの位置にある。なお，本古墳の南及び西南眼下に広がる谷は谷頭まで水田が開かれ，谷を下ったところにある地元で内藤池と呼んでいる場所から本古墳はよく見える位置にある。

東及び西側の墳丘は，古墳築造後に崩落したと考えられ，かなり急な斜面となっている。したがって盛土は流失している。古墳の背後にあたる北側には幅が東側で約1.0m，西側で約0.5mの浅い周溝がある。石室が開口する南側の墳丘裾は盛土が流失して不明瞭であるが，石室入口から墓道が南に向っており，地山の傾斜角度がこの石室入口付近から変化している。このことから南側の墳丘裾は石室入口付近と考えられる。したがって本古墳は，周溝内での直径が約6mの円墳であったと推定される。



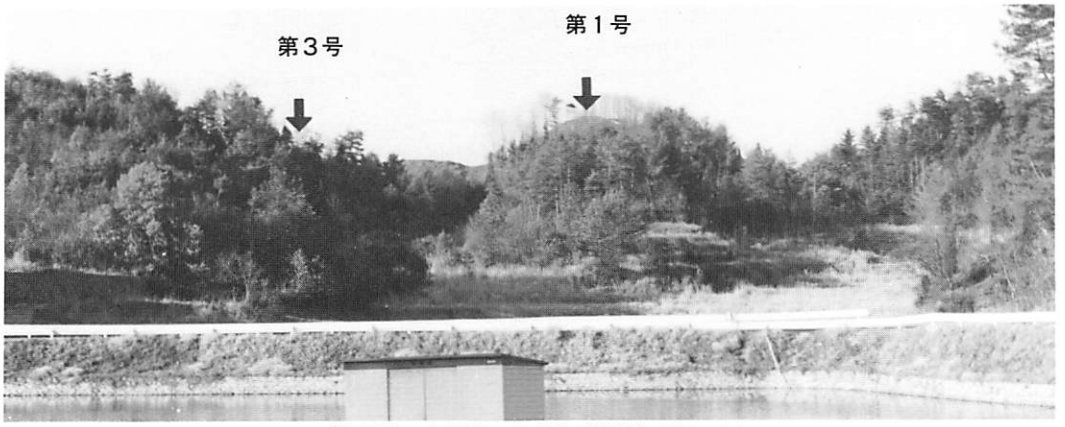
第3図　古墳群周辺地形図（数字は古墳の号数，矢印は石室の開口方向を示す）

b．石室（第７～10図）

石室は南西に開口した横穴式石室で，方向はN13°Eである。天井石は３枚残っていたがいずれも原位置を動いている。石室規模は，長さ3.9m，幅は中央部で1.1m，奥壁部で1.0m，高さは奥壁部で約1.0mである。東側壁の石がかなり抜き取られており，全体の状況は不明の点もあるが，石室の側壁はほぼ平行して構築され，玄室と羨道部との区別がない無袖の横穴式石室と考えられる。

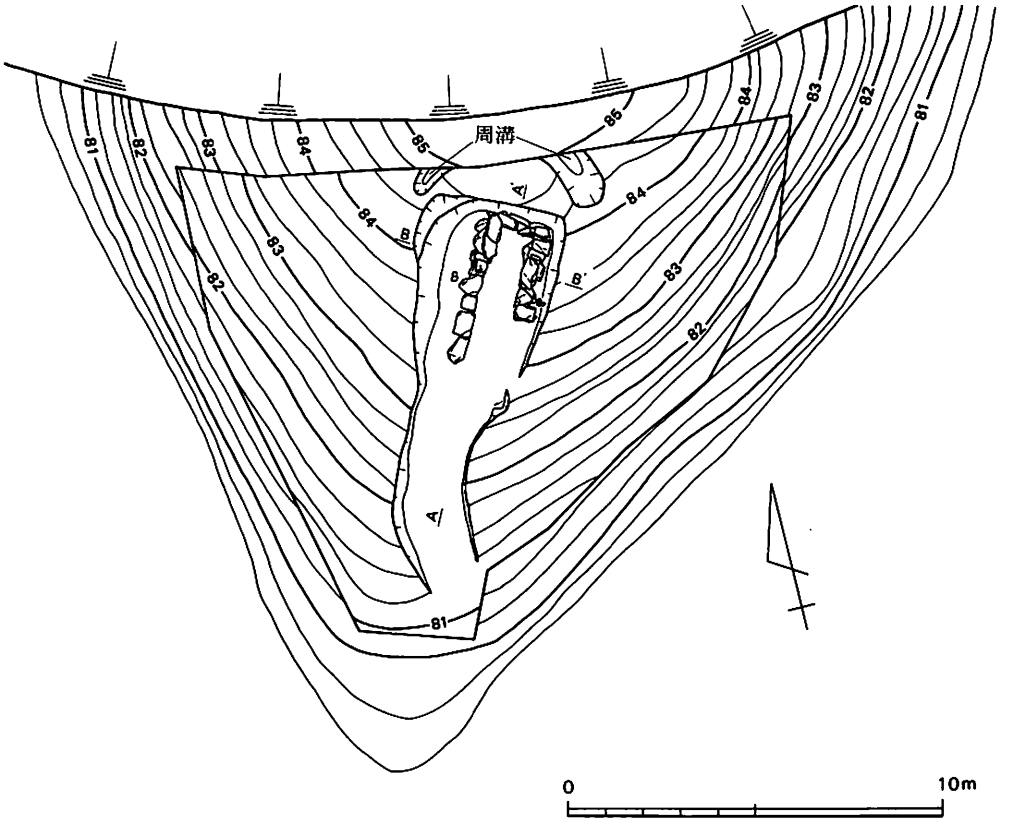
奥壁は，高さ94cm，最大幅74cmの偏平な花崗岩質の角張った石と細長い石をたて，その上にやや小さめの同じく花崗岩質の角張った石を２段ほど，高さを調整しながら積み上げている。

側壁は，かなりの石が抜き取られており，全体の状況は不明であるが，高さ40cm，平面が60×50cmほどの大きさの花崗岩質の角張った石を６個ずつそれぞれ最下段に裾え，その上に最下段の石よりは若干小さめの花崗岩質の角張った石を，間隙に小礫をつめながら二

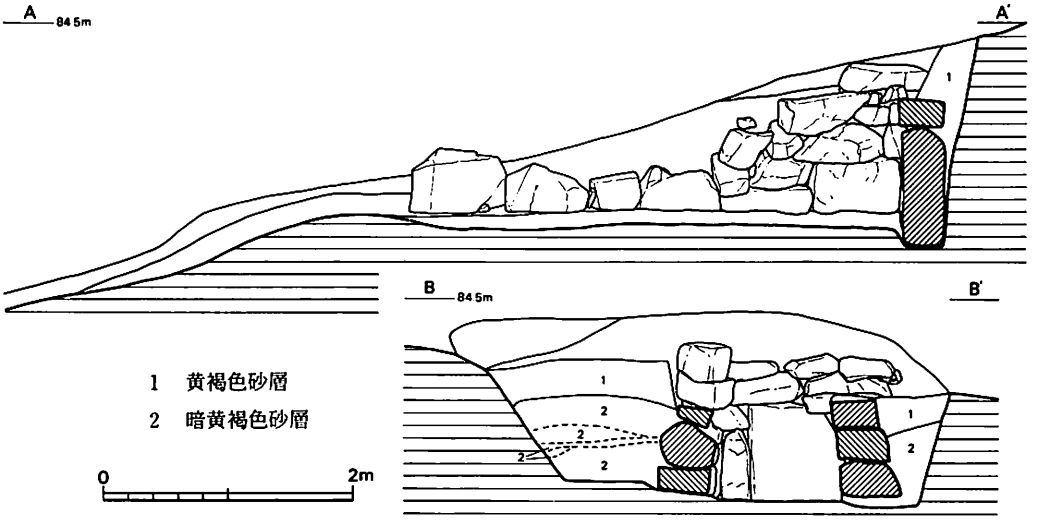


第４図　内藤池から望む古墳群（南から）

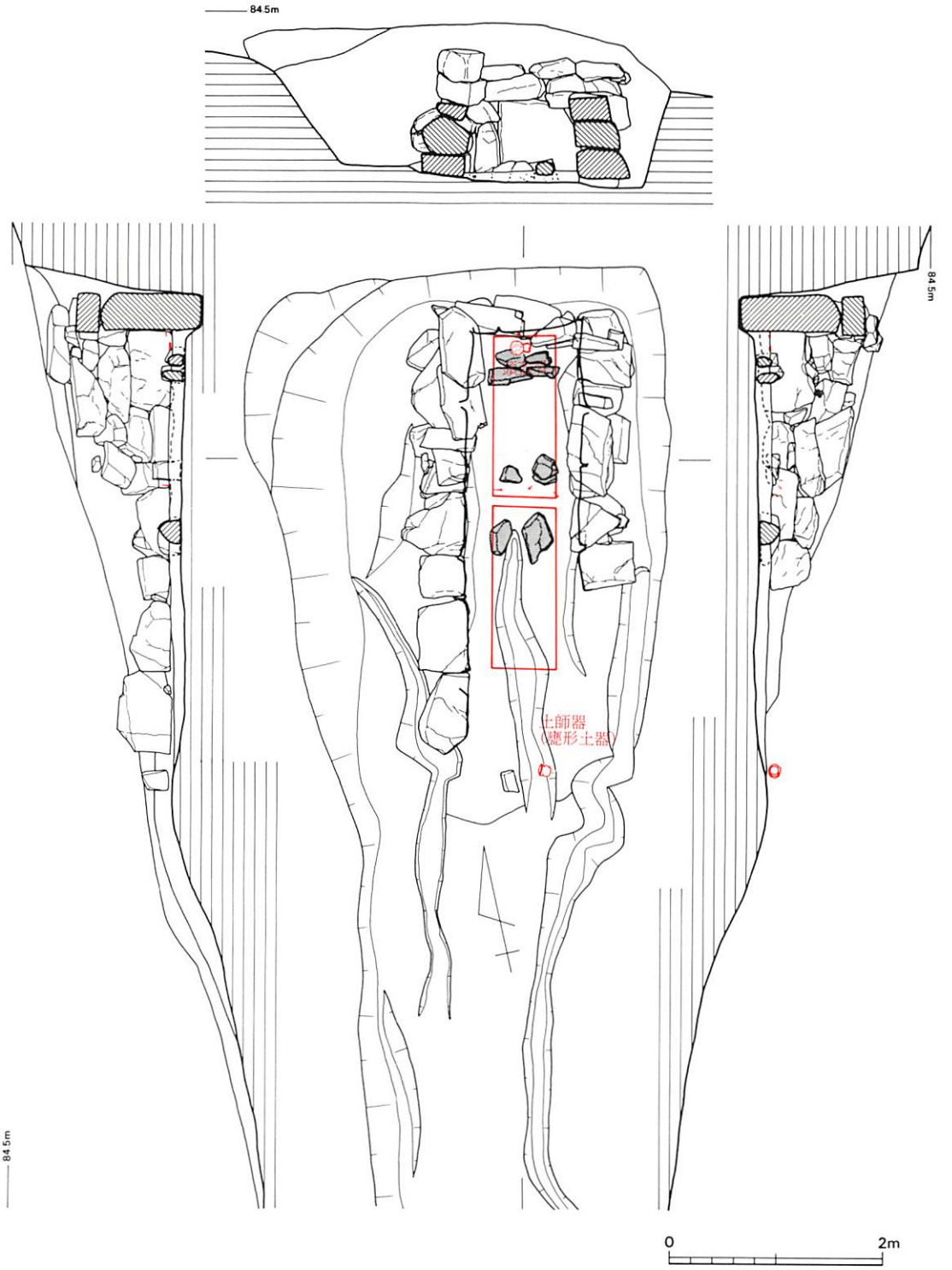
第５図　古墳群近景（東から）



第6図　第1号古墳墳丘測量図



第7図　第1号古墳石室土層断面図



第8図　第1号古墳石室実測図

1　墳丘及び石室の検出

2　石室全景
（南から）

3　掘り方

第9図　第1号古墳

1　東側壁

2　西側壁

第10図　第１号古墳石室

段ほどずつやや持ち送り気味に積み上げている。なお石室掘り方の底面は，石室床面（石室相当部分の地山面）よりいくぶん高く，側壁最下段の石は穴を掘って据えるのではなく，水平な掘り方地山面に並べて据えたような状況をしている。石材は，最下段の石は立方体ないしは直方体に近い安定感のある石を選んでいるが，それより上段の積石は，とくに奥壁付近では若干小さめの石を積んでいるほか，やや大きめの石を用いているなど雑な石積の印象をうける。したがって石材の搬入にあたって厳密な選択は行われなかったと考えられる。

ｃ．掘り方と墓道

石室掘り方は，石室奥部で上端幅3.9m，入口部で幅3.0m，入口から2.0m南の部分（墓

道部）で幅1.8m，先端部で1.6mであり，大きく西側に張り出した羽子板状の平面形をしている。西側の張り出し部分だけ石室の大きさが比較的小さなつくりであるのに対して，掘り方が大きすぎるような印象を受ける。掘り方最奥部から約3.0mの地点から南側へ，幅0.3m，深さ0.1mほどの溝が3本それぞれ掘り方の東側，中央，西側に走っている。地山面を掘り下げて形成した溝であり，排水溝と考えられる。

石室と掘り方の壁との間の埋土は，数cmから20cm余りの厚さで水平な土層の堆積がみられる(第7図)。しかしこの土層には，花崗岩のバイラン土のため不明瞭ではあるが，特別版築状につきかためて埋めたような形跡はみとめられない。

石室の入口から南に向かって延びる墓道は，幅1.7～2.0mである。西側では石室先端部の側石から約6.0mまで確認でき，東側は排水溝と考えられる溝の先端まで約5.0m確認できる。なお，この墓道は石室先端部から約4m付近で東南に若干曲がっている。

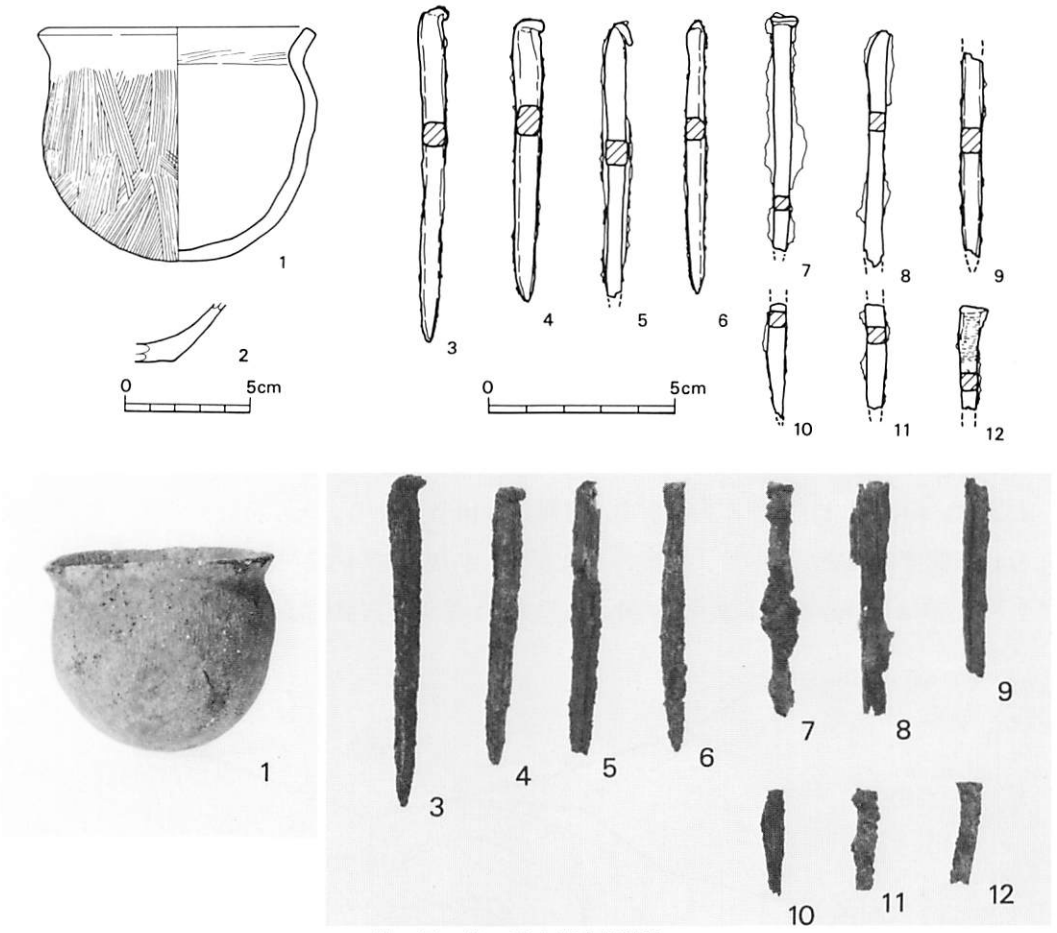
d．出土遺物

土師器甕形土器（第11図―1）は，丸底で，口径11.2cm，高さ9.5cm，胴部最大径11.0cmである。器外面には，成形時の凹凸を残し上部からやや雑なハケ目調整を行っているが，内面は比較的ていねいなナデ調整を行っている。色調は黄褐色で，焼成は良好である。第11図―2は墳丘東側裾部から出土した弥生土器ないしは土師器の小片である。

鉄釘は計10本出土した。いずれも頭部を偏平にして折りまげた形の角釘で，長さ及び太さから2種類に分けることができる。3～5は，長さ7.5～8.0cmで，断面が1辺0.6cm程度の太くて長い種類である。9もこの種類に入るであろう。6は，長さ7.4cmで，断面が1辺0.4cm程度のやや細い種類である。7，8，10～12はこの種類の釘であろう。なお前者に比べ後者は全体的に短いと考えられる。

e．小結

銭神第1号古墳は，石室側壁の石がかなり抜き取られ，天井石も大部分破壊され，あまり石室の保存状況はよくなかった。石室規模は，長さ3.9m，幅は中央部で1.1m，奥壁部で1.0m，高さは奥壁部で約1.0mと比較的小さい。しかし石室掘り方は，石室奥部で幅3.8m，入口部で幅3.0m，入口から2.0m南の部分で幅1.8mと大きく西側に張り出した羽子板状の平面形をしており，石室の規模が小さい割には掘り方が大きいという特色がある。これは，掘り方掘削の段階で当初の予定を変更したため掘り方が変形した形になっているのか，あるいはこの地域の7世紀段階の横穴式石室構築時の特色であるのかは，第3号古墳では破壊が著しかったため確認できなかった。墓道は，石室入口から5～6mにわたって検出したが，本来は尾根筋に沿ってもう少し長くつけられていたとも推定される。なお



第11図　第１号古墳出土遺物

斜面の傾斜がきついが，階段などの施設は確認できなかった。

古墳築造の時期は，土師器甕形土器１点のみからでは断定できないが，石室の規模，構築状況などから第３号古墳と同じ７世紀中頃と考えておきたい。

追葬の有無に関しては，鉄釘の位置や，棺台石の配置状況（第８図）などから２基の木棺の存在を推定したが，鉄釘の数が少ないことなどから，木棺は本来１基のみ（この場合長さは約2.0m程度）しか存在しなかったとも考えられよう。

第12図　第１号古墳頭蓋骨出土状況

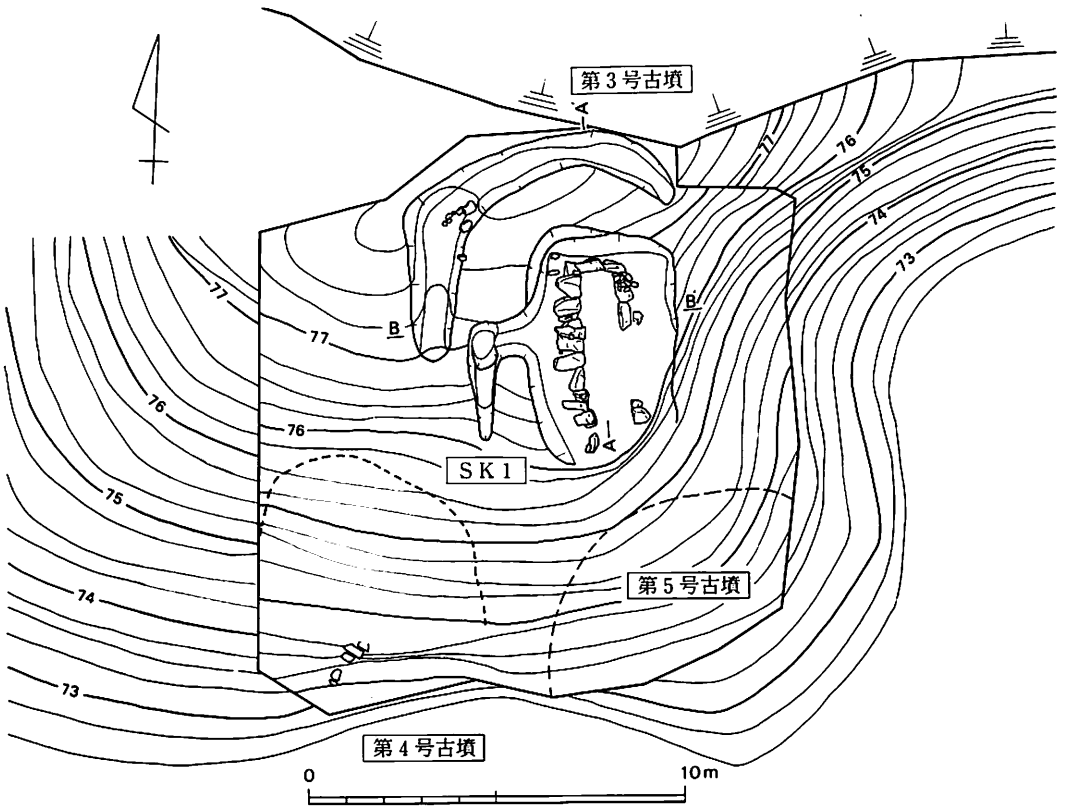
2.　銭神第３号古墳

ａ．立地と墳丘（第13図）

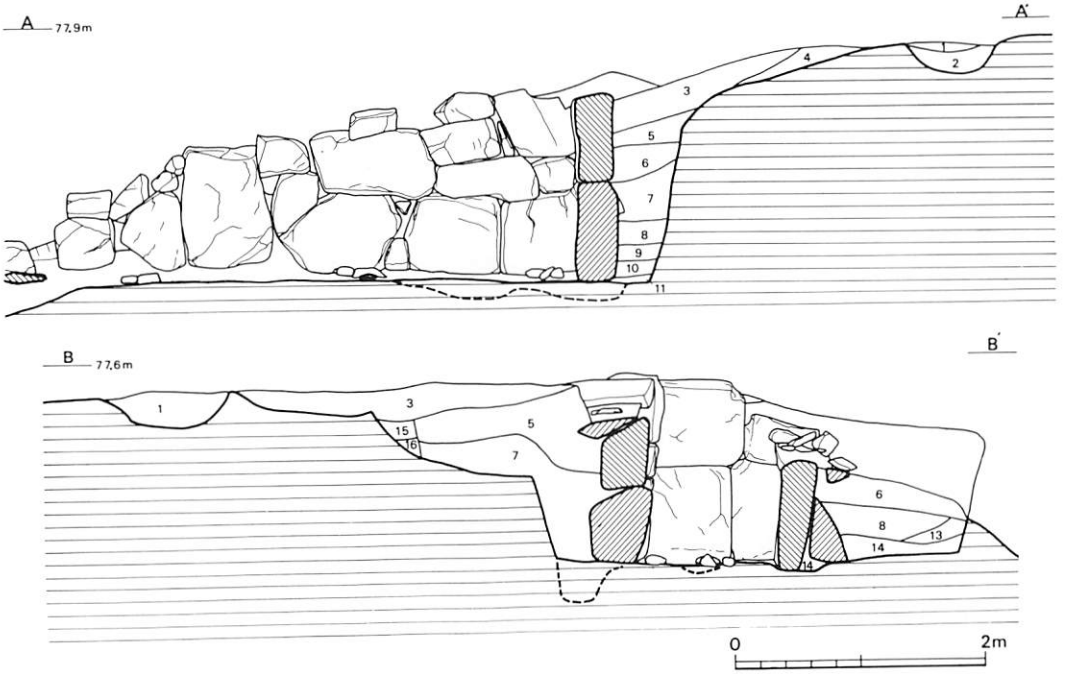
銭神第３号古墳は，北から南東方向にのびる尾根の頂部からやや南東方向へ下がった地点の東側斜面にある。古墳の所在するあたりの標高は約77mである。古墳の立地する尾根は幅が狭く，東側と南西側には深い谷が入り込んでいる。古墳の立地場所などを考えれば，これらの谷は古墳築造後に形成された可能性があり，東側斜面は石室掘り方を一部破壊する地点まで迫っており，墳丘盛土はすでに流失している。なお，古墳背後の尾根の北側で幅約1.0m，深さ0.2mの周溝を検出した。この周溝から推定すると，第３号古墳は，周溝内側の直径が約７mの円墳であったと考えられる。

ｂ．石室（第16～18図）

石室は，南に開口した横穴式石室で，方向はN10°Wである。天井石は全く残っていなかった。東側壁は破壊が著しく，側壁の石は５個しか残っていなかったが，石室規模は，長さ4.8m，幅は1.1m，高さは奥壁部で1.5mである。第１号古墳同様石室側壁はほぼ平行し，



第13図　第２号古墳墳丘測量図



第14図　第３号古墳石室土層断面図

第１層	黄褐色砂質土	第２層	黄褐色砂質土（小礫多い）
第３層	黄褐色砂質土	第４層	黄褐色砂質土（小礫多い）
第５層	黄褐色砂質土（小礫多い）	第６層	黄褐色砂質土
第７層	暗褐色砂質土	第８層	黄褐色砂質土（小礫多い）
第９層	赤褐色砂質土	第10層	灰色砂質土
第11層	赤褐色砂質土	第12層	黄褐色砂質土
第13層	褐色砂質土	第14層	暗黄褐色砂質土
第15層	黄褐色砂質土（小礫多い）	第16層	暗黄褐色砂質土（小礫多い）

第15図　第３号古墳調査風景

玄室と羨道部との区別がない無袖の横穴式石室である。

奥壁は，方形の大形花崗岩質の偏平な石４枚で構成している。厚さが30cmと薄いためか，東，西側壁の最奥部の石に立て掛けるようにして据えている。

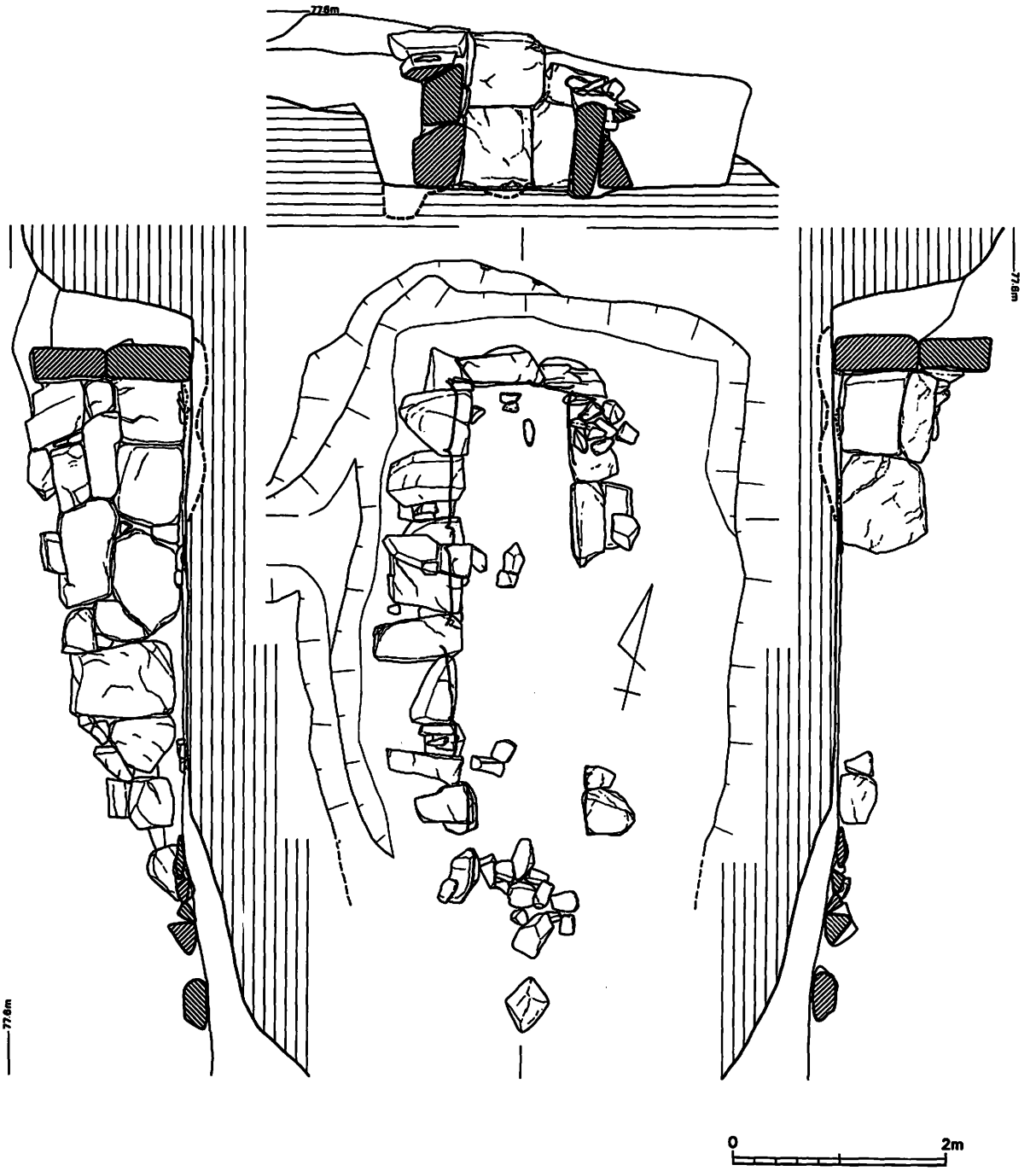
側壁は，東・西両壁ともほぼ同様の積み方をしており，２～３段に花崗岩質の角張った石を積み上げるのを基本としている。西側壁は，最下段に幅60～80cm，長さ60～80cm，厚さ40cm前後の石を６個ほど立て，その上にこれよりはいくぶん小さめの石を１～２段小口を内側にむけた最も安定した状態で積み上げ，間隙に小角礫を詰めている。東側壁は破壊

1　全景（南から）

2　全景（西から）

3　周溝

第16図　第３号古墳



第17図　第３号古墳石室実測図

1　石室（南から）

2　西側壁

3　掘り方

第18図　第３号古墳

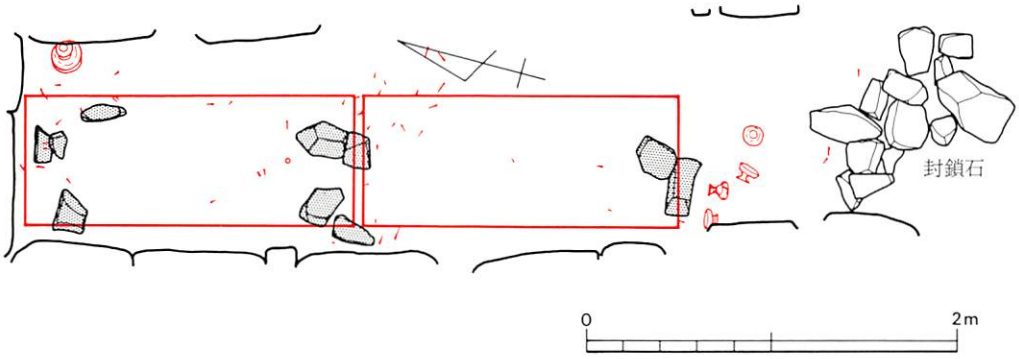
が著しく大部分の石は抜き取られているが，残っている数個の石から西側壁と同様の積み方が推定できる。控積みはなされていない。

c．石室掘り方

石室掘り方は，石室奥部から1.0m南側で幅4.2m，入口部分で幅3.6m，奥行5.2mのほぼ長方形の平面形をしている。東側部分は崩落が著しいため不明瞭であるが，残存部の状況からみれば掘り方と石室との間には1.0mの距離があり，あるいは第１号古墳同様東側に大きく張り出した羽子板状の平面形をしていたとも考えられる。なお掘り方底面には，第１号古墳にみられたような排水溝などの施設は認められない。

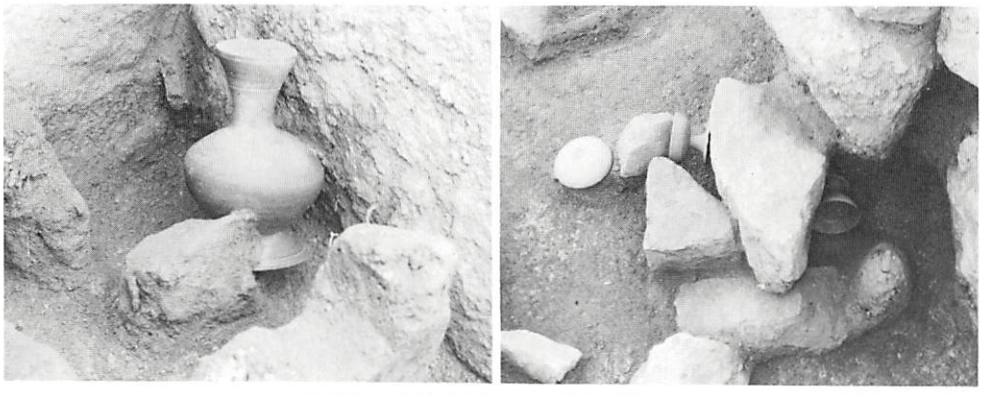
石室構築石との間の埋土は，花崗岩のバイラン土であるが，特別版築状につきかためて埋めたような形跡は確認できなかった。

なお，石室構築石をすべて除去した後，掘り方底面に上面0.7×0.8mで深さ0.2mほどの石室最下部の石を据えるための穴をいくつか検出した。これらの穴のうち北西隅の３つと，

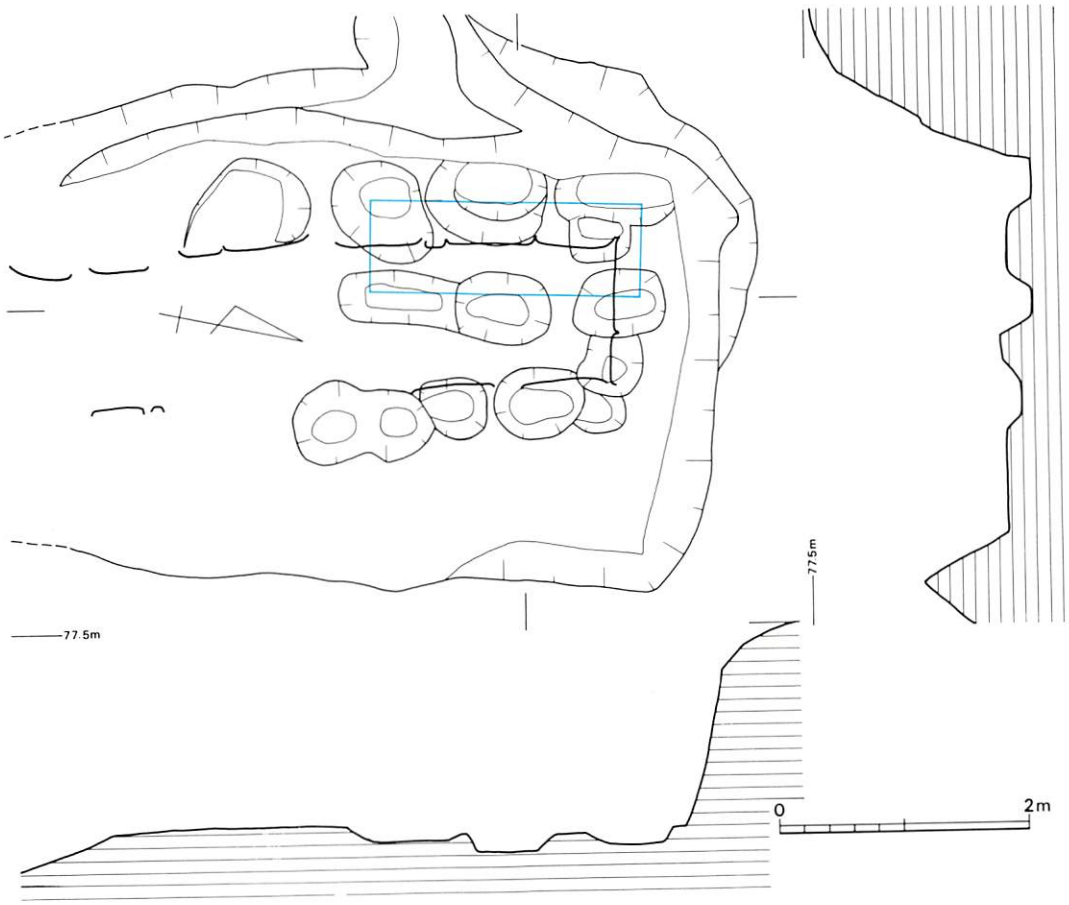


第19図　第３号古墳棺台石，遺物出土状況

（アミ目は棺台石，赤色は遺物，赤線は木棺推定位置）



第20図　第３号古墳須恵器出土状況



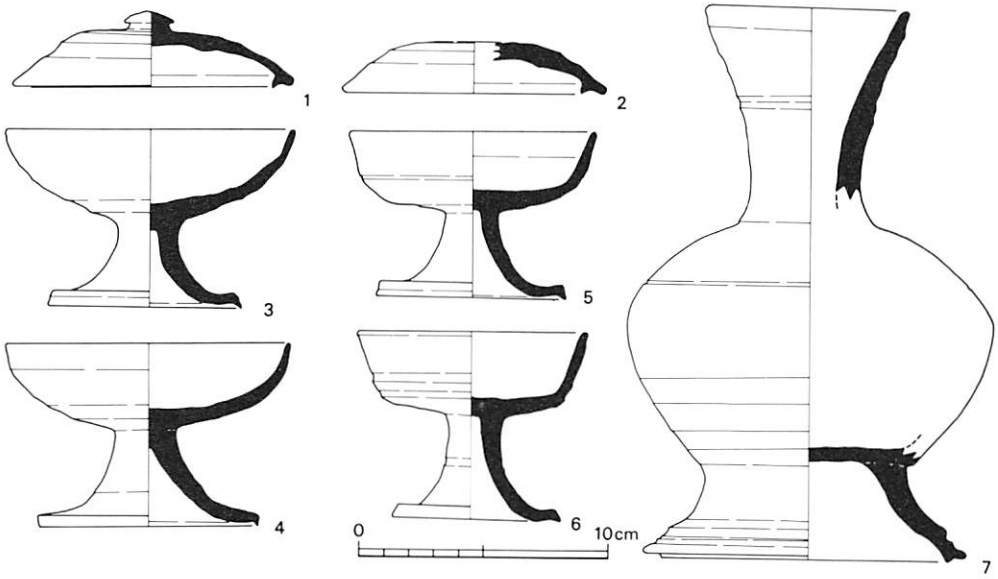
第21図　第３号古墳掘り方実測図

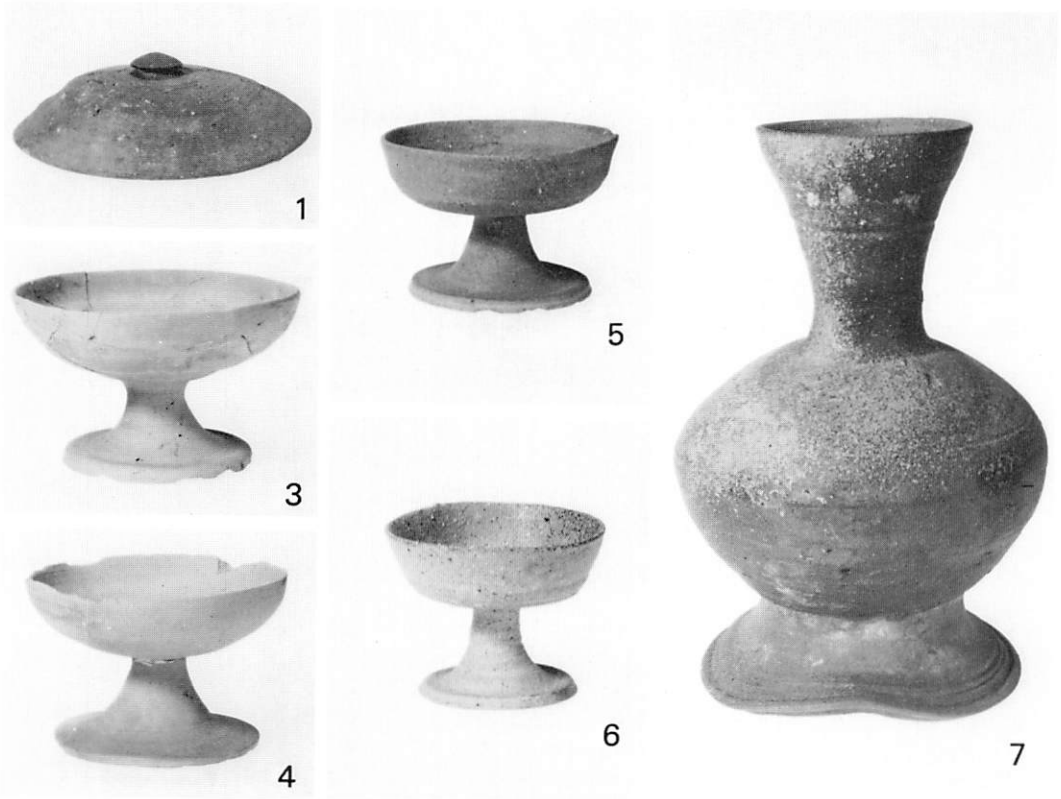
石室中央部分に存在する３つの穴はこの石室の石とは直接関係していない（第21図の太線が石室の石列を示す）。おそらくこの古墳が存在する以前に箱式石棺のようなものがつくられていた可能性が強い。この場合箱式石棺は長さ約2.0m，内法の幅約0.6mほどの大きさが想定できる（第21図青線）。

ｄ．出土遺物（第22，23図）

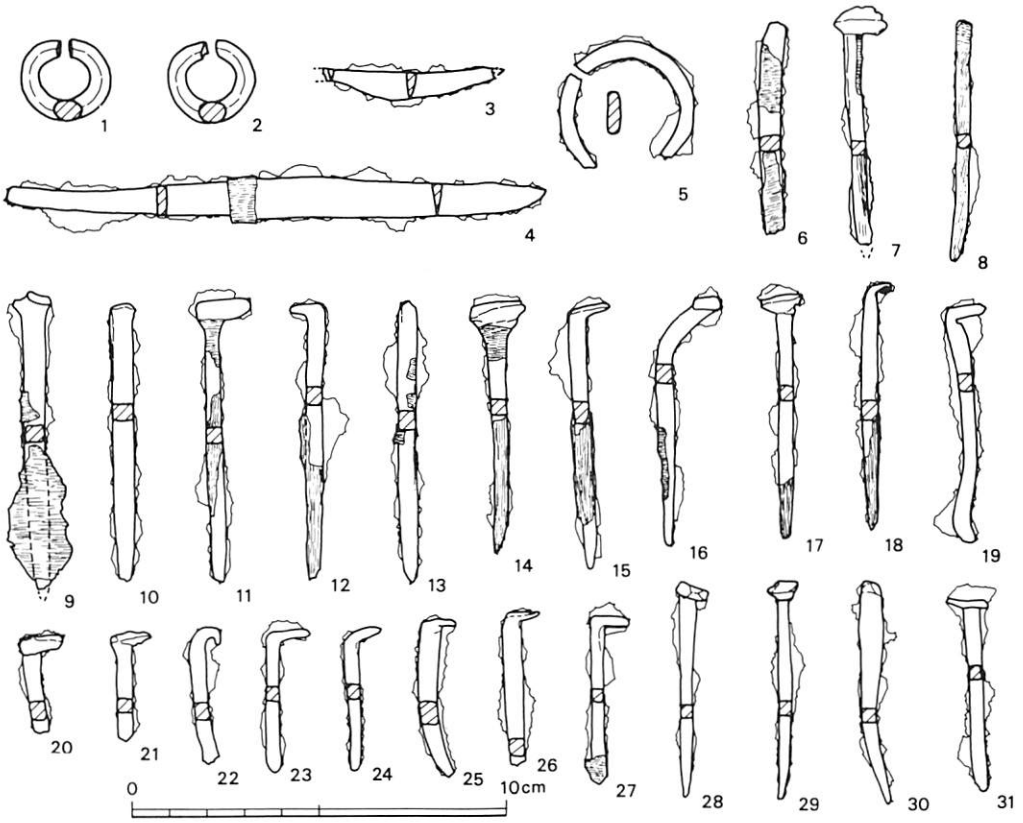
石室入口部から須恵器の高杯４点，石室最奥部北東隅から台付長頸壺１点，墳丘裾部から須恵器杯蓋２点，その他金銅製の耳環２点，鉄刀子１点，刀子状鉄器１点，鉄釘多数などが出土した。

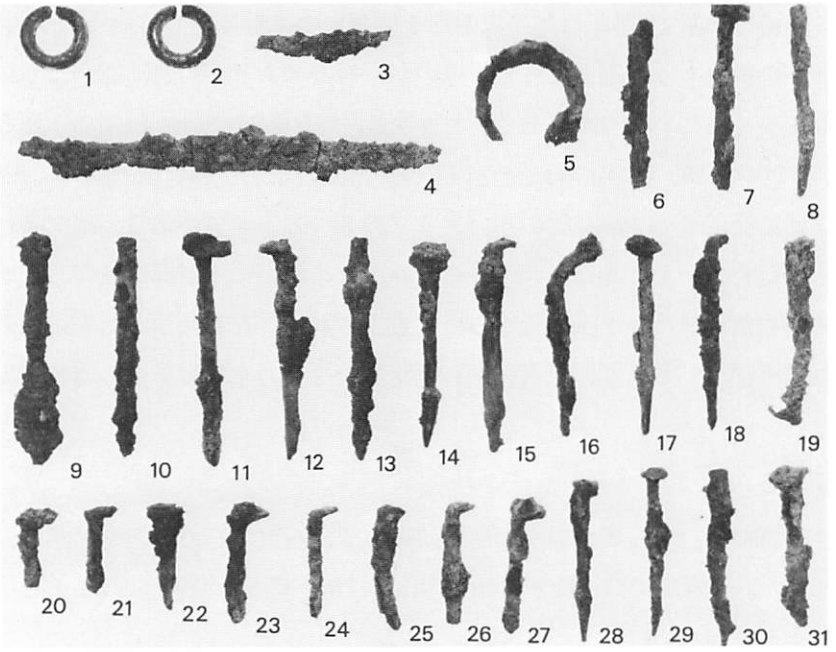
第22図－１は，口径11.4cm，器高2.3cmの須恵器杯蓋である。頂部には直径２cm，高さ0.8cmの擬宝珠様のつまみがつく。口縁部には内傾するかえりを有する。暗青灰色を呈し，焼成は堅緻である。２は破片であるが，１とほぼ同様の器形をした杯蓋と考えられる。３～６は須恵器高杯である。杯部の形態には３，４のように皿状の浅いつくりのものと，５，６





第22図　第３号古墳出土須恵器





第23図　第３号古墳出土金属製品（耳環・刀子・釘など）

のように杯部の下方に稜をもって口縁部が上方へ立ちあがる身のやや深いつくりのものの2種類がある。3は口径11.6cm，底径7.8cm，器高7.2cm，4は口径11.5cm，底径9.0cm，器高7.3cmの大きさで，いずれも淡青灰色を呈し，内外面はやや磨耗し，焼成は脆弱である。5は口径10.0cm，底径7.7cm，器高6.9cm，6は口径9.3cm，底径6.8cm，器高7.5cmの大きさで，いずれも青灰色を呈し，焼成は堅緻である。杯部外面には1～2条の沈線がめぐっている。7は口径8.3cm，胴部最大径14.7cm，底径13.0cm，高さ22.0cmの大きさの須恵器台付長頸壺である。長頸壺と高さ4.9cmの高い脚台部を別々につくり，接合してつくっている。頸部外面に1条，肩部に1条，脚部外面に2条の沈線がめぐる。青灰色を呈し，焼成は堅緻である。

第23図－1，2は金銅製の耳環である。外形はいずれも2.4×2.2cmで，断面は6×8㎜の楕円形状を呈する。黄金色をしており，保存状態は比較的良い。3は現存長4.6cm，背部厚3㎜の刀子の形態をした鉄器である。刃は片刃である。本来もう少し大きかったのが研ぎ減らしによって現状のように小さくなったとも考えられるが，刀子と断定するには若干の疑問が残る。4は全長14.4cm，刃部長7.7cm，茎部長6.7cm，背部厚3㎜の刀子である。茎部には一部木質部が残存している。5は墳丘南西部裾から出土した鉄器である。幅1.1cmで両端が尖り気味のつくりになった鉄板で，直径3.6cmに環状につくっている。何かの留め金具様のものとも考えられるが機能は不明である。6～31は鉄釘である。いずれも断面の1辺が4～5㎜の角釘で，頭部は軸の末端部を偏平につぶして逆L字形に折り曲げている。先端部は4面の稜をもって細くなっているのが一般的であるが，21，22のように2面のみからつぶしてつくっているものもある。大きさは，長さ6.5～8cm，断面の1辺5㎜前後の長くて太いタイプ，28，29のように長さ約6cm，断面の1辺4㎜前後の細くて長いタイプ，20～27のように長さ3～4cmほどの短いタイプの3つのタイプがある。前二者は木棺によって異なっていたのかどうかは不明である。かなりの鉄釘に木質部が残存しており，それによると木棺の板の厚さは2cm前後だったと推定される。なお図示したもの以外にもかなり多量の鉄釘が出土しており，棺台石から推定した2基の木棺以外にも木棺が存在した可能性もある。

e．小結

銭神第3号古墳は，墳丘東側斜面の崩落が著しく，石室の石も東側の大部分は同様に残っていなかった。石室規模は，長さ4.8m，幅は1.1m，高さは奥壁部で1.5mと第1号古墳よりもひとまわり大きい。

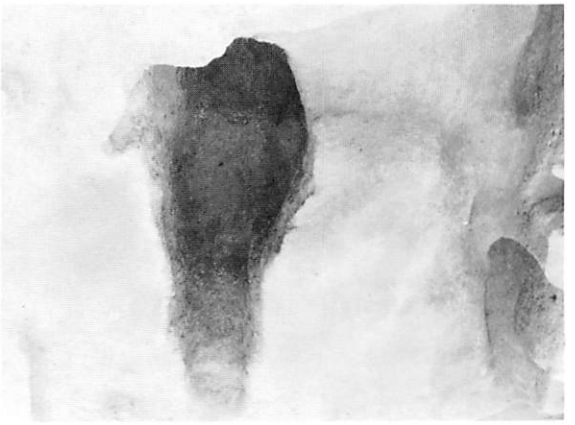
石室の石材の構築状況は，第1号古墳は最下段に立方体に近い石を最も安定感のある状

態で据えていたのに対し，第３号古墳は最下段の石は大型の偏平な石を横にして立てて並べ，その上に最も安定感のある状態で積み上げている。石室の構築順序は，最初に西側壁の石を奥壁部から入口部にむかって並べ，次に奥壁，最後に東側壁の石を奥壁部から入口部へむかって並べている。したがって，西側壁の最奥部の石はその端部が奥壁の石よりも北側へ突出しているのに対し，東側の最奥部の石の端部は，最奥部の石の内側の面に接した構造となっている。

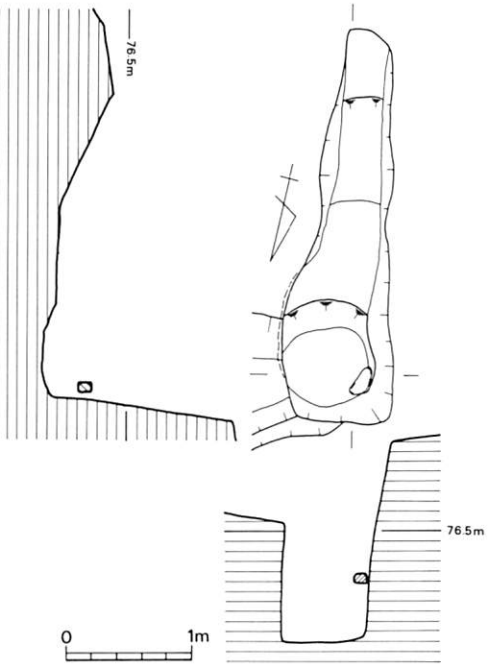
高杯の第22図－３，４と同図5，６との間には若干の型式的な差が認められ，追葬時期の差を示しているとも思われるが，古墳築造の時期は，出土遺物の全体から推定してほぼ７世紀中葉を前後する時期と考えられる。おそらく追葬も最初の埋葬からあまり時間を隔たらない時期に行われたのであろう。なお，石室のほぼ中央部東寄りの部分に多量の鉄釘の分布が認められ，推定した２基の木棺以外にもう１基木棺が存在した可能性も考えられる。

ｆ．ＳＫ１（第24，25図）

第３号古墳の石室掘り方の西側約0.6mの地点にほぼこれと同一方向をとって存在する土壙である。直径1.0m，深さ1.5m前後の円形の土壙に，幅0.6m，長さ2.0mほどの溝が結合したような形態をしている。底面のレベル差などから石室の排水溝とは考えられず，性格は不明である。出土遺物はなく，所属時期も不明である。



第24図　ＳＫ１（南から）



第25図　ＳＫ１実測図

Ⅳ　ま　と　め

銭神第１，３号古墳の概要は以上述べてきた通りである。ここでそれらを整理し，まとめとしたい。

墳丘規模及び墳形は第１，３号古墳とも周溝から推定すると直径７m前後の円墳で，内部主体として長さ４m，幅１m，高さ１m前後の横穴式石室を設けている。築造の時期は，後世の攪乱を受け，出土遺物も少なく，追葬の時期などとも関連してはっきりしない点もあるが，第３号古墳はほぼ７世紀中葉を前後する時期であり，第１号古墳も石室のつくりなどから比較的近い時期につくられたと考えられる。立地の特徴として，２基の古墳とも尾根筋の最高所に極めて近い位置にありながら，本来古墳の立地点として最も良いと思われる丘陵部の最高所に造られていない点がある。地山は花崗岩の風化土であるため崩落が激しく，そうした自然条件を配慮しての占地とも考えられる。なお，後半期の大型横穴式石室墳は一般的に丘陵裾部に造られているのに対し，この銭神古墳群は丘陵尾根部に横穴式石室を内部主体とする古墳群を形成しており，前半期の古墳群と似た立地をとる。このような古墳の立地上の傾向は，同時期頃の芦品郡新市町尾市（おいち）古墳，深安郡神辺町永谷第１，２号古墳，福山市芦田町曽根田白塚古墳などにもみられることから，終末期古墳の立地の一つの特色といえるかもしれない。また，本古墳群は尾原川流域の古墳に比べて後期でも若干下がる時期に造られていることは，この地域が，尾原川流域より遅れて開発されたことを示している。

なお，この２基の古墳を調査中に第３号古墳の周辺部で新たに３基の横穴式石室を内部主体とする古墳があることを確認した。未調査のため詳細は不明であるが，立地の条件・石室の開口方向などから，第１，３号古墳と何らかの関係があり，近似した時期に形成されたと推察される。しかし，第１号古墳は第２～５号古墳からやや離れて存在しており，これらがはたしてまとまって１つの古墳群を形成ていたのかどうかは，今後付近の古墳群のあり方なども参考にして考えるべき問題であろう。ただ少なくとも第３，４，５号古墳は近接して存在し，１つの群を構成している。

ほぼ似た時期には，尾原川流域には多くのいわゆる畿内型とも称されるような大型の横穴式石室墳が構築されている。そうした古墳群と対比して考えるとき，この銭神古墳群は当時の水の便などの土地条件が悪いため開発が遅れていた惣定の谷の開発を手がけていった勢力の一連の墳墓と考えられる。いずれにしろ残りの古墳の調査を終了した段階で，改めてこの銭神古墳群全体の性格を論じてみたい。

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書 第 53 集

銭神(ぜにがみ)第 1 ・ 3 号古墳発掘調査報告書

編集・発行
財団法人広島県埋蔵文化財調査センター
733 広島市西区観音新町 4 丁目8-49
TEL(082)295-5751

発 行 日
昭 和 61 (1986) 年 3 月

印 刷 所
産 興 株 式 会 社